

「瓜子姫」——話型分析及び「三つのオレンジ」との関係——

剣持弘子

はじめに

昔話「瓜子姫」は話の内容が面白いだけでなく、研究の対象としてもさまざまな問題を含み、バリエーションに富んだ大きな話型群である。『日本昔話通観』ではこのうち誕生モチーフを含むものを「瓜子姫」とし、含まないものを「瓜子姫とあまんじやく」として別の話型に分類している。この分類については後に述べるように再考を要すると思われる所以で、ひとまずこの二つを合わせて詳細な話型分析を試みた。その分析資料をもとに今回はとくに主人公の運命を中心にして考察をすすめる。

まず全国の分布状況を一望して「瓜子姫」という話型群の全体像を概観し、地域的な特徴を明らかにする。その上で「三つのオレンジ」との対比を試み、両者の一致点と相違点を確認し、とくにその違いの意味を明らかにしたい。そして最後にこの話型群の『日本昔話通観』における分類について再考を提言したい。

資料は同朋書刊『日本昔話通観』、岩崎美術社刊『全国昔話資料

集成』、日本放送協会刊『日本の昔話』、三井書店刊『昔話研究資料叢書』、ぎょうせい刊『日本の昔話』他多数。分析に使用した話数は四八七話である。『日本昔話通観』の中で類話として梗概化されている話については、できるかぎり原典にあたるように努力したが、類話をそのまま使う場合は分析資料として使用に耐えると判断したものにかぎり、梗概化の甚しいものは割愛した。

一、「瓜子姫」の分布状況

1 分類の根拠

「瓜子姫」の分布図はすでに福田晃氏⁽²⁾や大島彦氏⁽³⁾によるものが知られている。両氏の分類は主人公の姫が「死ぬか死ないか」に拋っている。大島氏の場合、瓜の入手場所が組み合わされてはいるが、「死ぬか死ないか」がポイントであることには変わりはない。主人公が死ぬか死ないかはたしかに「瓜子姫」を分類するのに重要なポイントにはちがいない。しかし地域的な特徴を見るにはそれだけでは十分とはいえないのではないか、今回全国の資料に目を通

してまず感じたことはこのことであつた。

実例をあげよう。島根県邑智郡に次のような話がある。

例話① 婆が川で拾つた瓜から女の子が生まれ、瓜姫と名づけ育てるときくなつて機を織るようになる。ある日爺と婆はだれが来ても戸を開けるなと言い置いて出かける。留守にあまんじやくが来て、戸を少しずつ開けさせ、姫を柿もぎに誘い出す。ところが、あまんじやくは自分が木に登つて柿を食べ、姫には渋い実を投げる。姫が文句をいうと、姫と着物をとりかえ、姫を木にくくりつける。あまんじやくが姫の家に戻つて機を織つていると、爺と婆が帰つてくるが、二人は異変に気がつかない。そのうち嫁に貰われることになり、爺と婆は偽姫を駕籠に乗せて出かける。柿の木の下を通ると上から姫が「わしが乗つていく駕籠へ乗つて、あまんじやくが嫁入りするかい、ピーヒヨロ」と泣く。姫は救われて嫁入りし、あまんじやくは三つに切られて、くま」と麦とそばの根に埋められたので、それらの根は赤い。

一方、岩手県紫波町の話はこうなつてゐる。

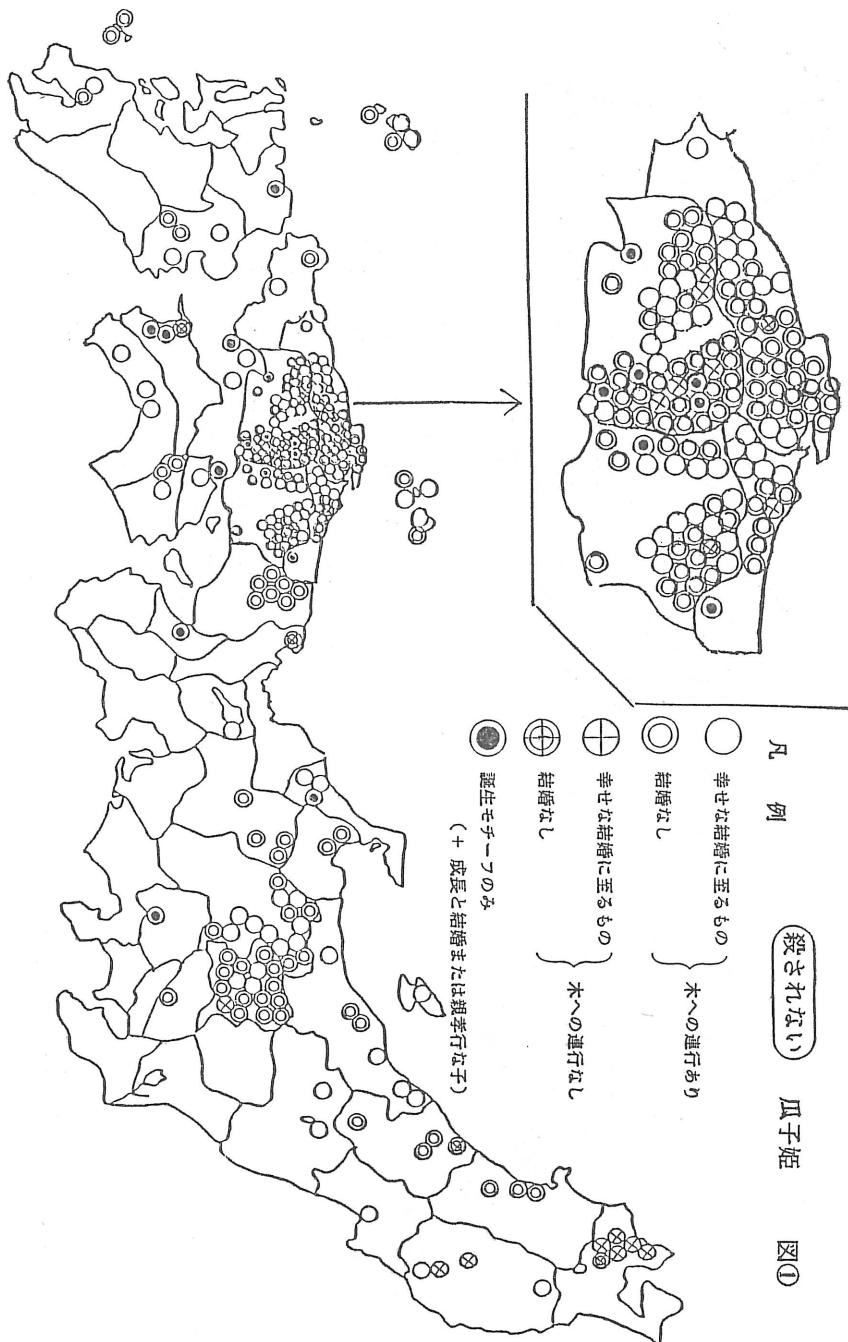
例話② 婆が川で拾つた瓜から女の子が生まれ、瓜こ姫と名づけてかわいがると、姫は機を織るようになる。ある日爺と婆はだれが来ても戸を開けるなと言い置いて出かける。留守に山姥が来て少しづつ戸を開けさせ、中へ入ると姫に菜板と包丁を出させ、姫をすたずたに切つて骨だけ残して食べ、骨を庭の隅に埋めて逃げていってしまう。爺と婆が帰つてきて姫を探していると、庭の隅から鳥が

これは二話とも『日本昔話通観』の典型話である。
この二つの話の違いは、単に主人公が死ぬか死ないか、或は殺されるか殺されないかの違いではないことは明らかであろう。

福田氏が一三八話を分類された段階では、姫が殺される東北型と西南型とは関東地方を境にかなりきれいに分かれていた。ところが大島氏の分類された二七七話はそれほどきれいには分かれていない。西南型Ⅱ殺されない、と簡単にいうことができなくなつていて、西南地方面にも殺される話が多くなり、東北地方面にも殺されない話がかなり混つてきているのである。
それでは、これらの殺される話どうし、或は殺されない話どうしは地域が違つても同じ内容をもつてゐるのだろうか。それとも地域によつて違いがあるのでだろうか。分類の根拠はここにも求めなければならないだろう。
私は殺される話と殺されない話を別の分布図にしてみた。資料に目を通した印象では地域的な特徴は殺される話の方に顕著であると思われたので、両者を分けることでよりわかりやすくしたのである。図①が殺されない話の分布図である。図にあらわれない細部の地域的な特徴はかなり顕著であるが、今回のテーマに即してみるかぎり、つまり主人公の運命という觀点からは地域差はあまりないようである。しかし念のため、◎印、幸福な結婚にいたるものと、○印、

一羽「赤い着物も櫛もいらない、ホーホケキヨ」と鳴いてとんでいき、爺と婆は泣いて悲しんだ。

凡例 終れない瓜子姫 図①



凡例

殺される 瓜子姫

図②

食い殺される

岩手県の約3/4(25例)が粗板で切り刻まれたり残りを盆斐にも食わせたりと、より残酷で具体的。他県では青森東部に4例、宮城、新潟、秋田東北部に各1例みられる。

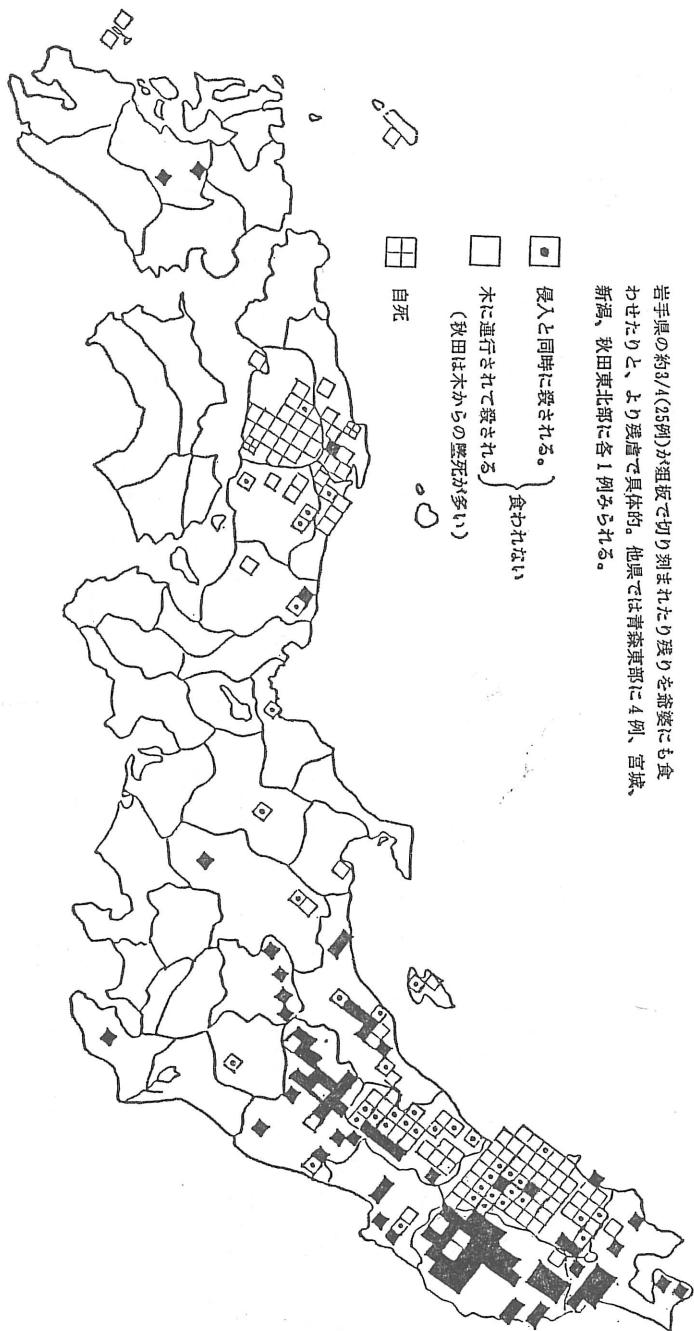
□ 長入と同時に殺される。

食われない

□ 木に通行されて殺される
(秋田は木からの墜死が多い)

■ 自死

殺され方による分布



いたらないもの、つまり子どものまま、いいかえれば元の状態に回復して終るものと区別してみた。この分類はたとえ分布に地域的な差があまり出なくても、話型のサブタイプを再考する際の重要なポイントであり、その分布を明らかにしておく必要があると考えたからである。

また、木に連れ出されるモチーフのないものを④印として区別した。これは木に連れ出されるモチーフが殺されない話に一般的にみられるモチーフであり、このモチーフのない殺されない話、というものが注目に価する存在であると思われたからである。そしてこのモチーフが殺される話の方ではいつそう重要な分類の根拠となるためである。

一方、図②の殺される話は殺され方の違いによって分類した。それは殺され方の違いが話の違いを端的に表わしていると判断したからである。

■印は食い殺される話である。敵が侵入するとすぐ、或は多少のやりとりの後、食い殺される。木に連れ出されてから、ということはほとんどない。

□印はただ殺されるとしか語られない話である。侵入と同時に殺されるが食い殺されるわけではない。

○印は木に連れ出され、その上で殺されるものである。木に連れ出されるモチーフは、先にも述べたように殺されない話に一般的にみられるモチーフであり、木に連れ出されてから殺されるという場合には必ずしもはじめから殺意があつたとは思えないふしがある。この点で侵入と同時に殺される場合と木に連れ出されてから殺され

る場合とでは、食い殺されないという点では同じでも、大きな違いがあるといえよう。さらに細かいことをいえば木に連れ出されてからの殺され方にも地域的な特徴はみられるが、図が煩雑になるので、今回は、秋田には墜死が多いと指摘するにとどめたい。

2 地域的特徴

以上の分類によつて作成した分布図から地域的な特徴をみてみよう。

図①の殺されない話の方をみると、たしかに西南地方に多く東北地方に少ないということはいえる。しかし、その中での地域的な違ひといえば、木に連れ出されるモチーフのない話④が青森県西部にやや片寄つてみられるくらいのものである。幸福な結婚にいたるものとのいたらないもの、つまり元の状態への回復に終るものとの比率はそれほど地域的な特徴を示しているとは思えない。話数の多い所では同じようく混在しているからである。しかし、結婚にいたらない話が多いことは、日本の特徴的な現象とも考えられ、注目に価する。なお、誕生モチーフのみの話○が西南地方に片寄りをみせているが、これは、殺されない話が西南地方に多いことに伴う現象であろう。誕生モチーフのみの話については今後の課題としたい。

一方、図②の殺される話の方をみると、全体として東北地方に多く西南地方に少ないとすることはたしかであるが、それだけでなく、かなりはつきりした地域差が出ていることがわかる。

まず、東北地方には食い殺される黒い印が目立つにたいして、西南地方では食い殺されない白い印が圧倒的である。しかも、木に

連れ出される話□が、連れ出されない話□にくらべて断然多いことがわかる。

また、黒い印が目立つ東北地方でも、日本海側は西南地方と同じように白い印が多くなっていることがわかる。つまり同じ東北地方でも、日本海側は食い殺される話が少なく、逆に木に連れ出されてから殺される話が目立つという点で太平洋側と区別され、西南地方と共に通しているわけである。

それにたいして、東北地方の太平洋側は圧倒的に食い殺される話が多いのが特徴である。しかも、この図には表われていないが、その内容をみると、とくに青森県東部と岩手県ではその殺され方が残虐で具体的なのである。例話②の岩手県の話のように、敵は姫を菜板にのせて切り刻んでから食べたり、或は「狸の婆汁」のように爺や婆にも食わせたりといった具合である。ところが宮城、福島、新潟、群馬と西南に下るにつれてその食い殺し方の表現は変化していく。一口に呑みこむとか頭からガリガリという表現はときにはみられるが、全体としては具体的な表現は減り、ただ食い殺されるというだけの語りがふえてくるのである。そして、殺される話そのものも少なくなってくる。

しかし、熊本にも食い殺される話が二つみられるところから、この残虐な傾向は西南地方に向つてといつより、日本の中央部に向つて薄れていよいといえるのかもしれない。そして、東北地方の日本海側が奥羽山脈を境に太平洋側とはつきり分かれ、中央に近い様相を示しているということは、この東北地方の日本海側のかつての海路による中央部との近きを示しているといえるのではないだろうか。

ただ、秋田、山形は殺され方の傾向が西南地方に近いとはいえ、全体としては殺される話の方が圧倒的に多いわけであるし、また、青森西部は逆に殺されない話の方が多くても、木に連れ出されるモチーフを含まない場合が多く、その点で東北地方の東部と共に通するところから、結局これらの奥羽山脈西側は中間的、折衷的な性格を示しているということなのであろう。

以上、主人公が殺される話が東北地方に多く、殺されない話が西南地方に多いというだけでなく、とくに殺され方に地域的な特徴があることをみてきた。殺されない話は東北地方のものも西南地方のものも、細部を除いてはあまり違いが認められず、青森県西部の場合のみ、木に連れ出されるモチーフを欠くことで違いを示している。それにたいして、殺される話は、西南地方の殺されない話に混在しているものと、東北地方東部の話とでははつきり違つてていることがわかつたのである。そして、「瓜子姫」という大きな話型群の両極は、東北地方東部の、具体的に残虐に殺される話と西南地方に多い、殺されずに幸福な結婚にいたる話というよう大きく違つてきていたことが明らかになった。

3 主人公の運命を左右するもの

以上のような地域による主人公の殺され方の違いが示すものは、敵対者の力の差、性格の違いにほかならない。そしてその違いが主人公の運命を左右しているということなのである。
敵対者は大部分の話では天邪鬼になつてゐるが、東北地方では鬼婆や山姥になつてゐる例が目立つ。また、熊本の二話では鬼となつ

ている。しかし、たとえ天邪鬼となつてゐる場合でも、東北地方東部の場合は、西南地方の單なるよこしまな邪魔者、或はいたずら者でしかない天邪鬼とは違つて、その実体はやはり人を食う恐い鬼なのである。五来重氏が指摘されたように、菜板の上で姫を切り刻む者は、説経唱導や地獄の絵解きでイメージされた地獄の鬼であり、人を一口に呑みこんだり、頭から食う者は『今昔物語集』などにみられるような人食い鬼のイメージなのである。

今よりもっと自然の脅威が大きかつた時代に、その得体の知れない脅威を具現したような敵である鬼に主人公が食い殺され、爺と婆を嘆かせてそれで終つてしまふ悲劇と、より人間的で力も弱い敵に一度は邪魔をされはしても、主人公は結局幸福な結婚にいたる、上昇性の強い話とでは主題ばかりか構造までも違つてきてゐるといえ

るだろう。

このように両極をなして異なる話も、少しずつ変化し、少しずつモチーフを重ねながらたしかに繋つていて、いずれも主人公を同じくする大きな話型群を形成しているといえるのではあるが、当然、同一話型としてひとまとめには論じられない面がある。

「瓜子姫」が「狸の婆汁」や「継子と鳥」などと近い構造をもつてゐるという指摘があるが、それは東北地方の悲劇的な話についていえることであろう。また、ヒロインが必ず殺される運命にあるといふ、南太平洋諸島のハイヌウェレ神話との関連についても同じことがいえよう。

東北地方に多い、むごたらしく殺される「瓜子姫」が悲劇であり、その構造がやはり悲劇性指向ともいえる「狸の婆汁」や「継子と

鳥」に近いとすれば、一方西南地方に多い幸福な結婚にいたる「瓜子姫」はヨーロッパ型の幸福を指向する「三つのオレンジ」に近い構造をもつてゐるといえるのではないだろうか。「瓜子姫」の両極の話の違いについてさらに追究することは興味深いことではある。しかし今は西南地方に多い、幸福な結婚にいたる「瓜子姫」が御伽草子の「瓜子物語」とひじょうに近い関係にあり、このことが追究の一つの鍵となるだろうということだけを指摘して、論を「三つのオレンジ」との対比にすすめたい。

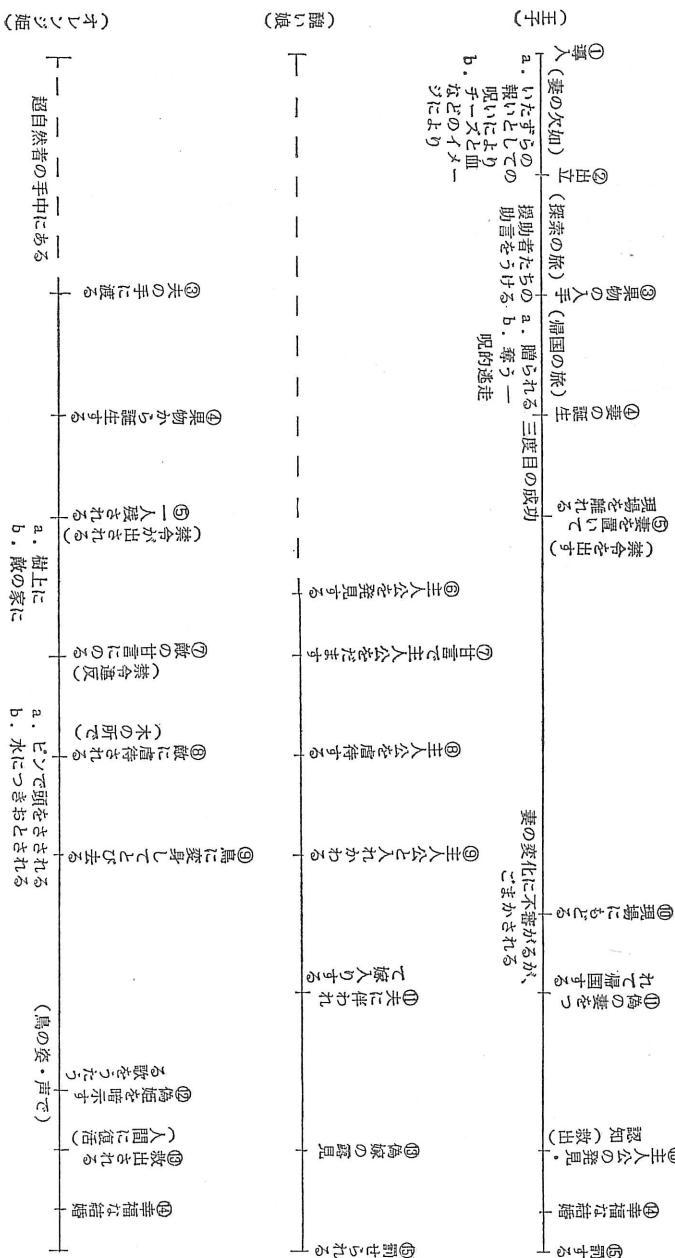
一、「瓜子姫」と「三つのオレンジ」の関係

1 一致点と相違点

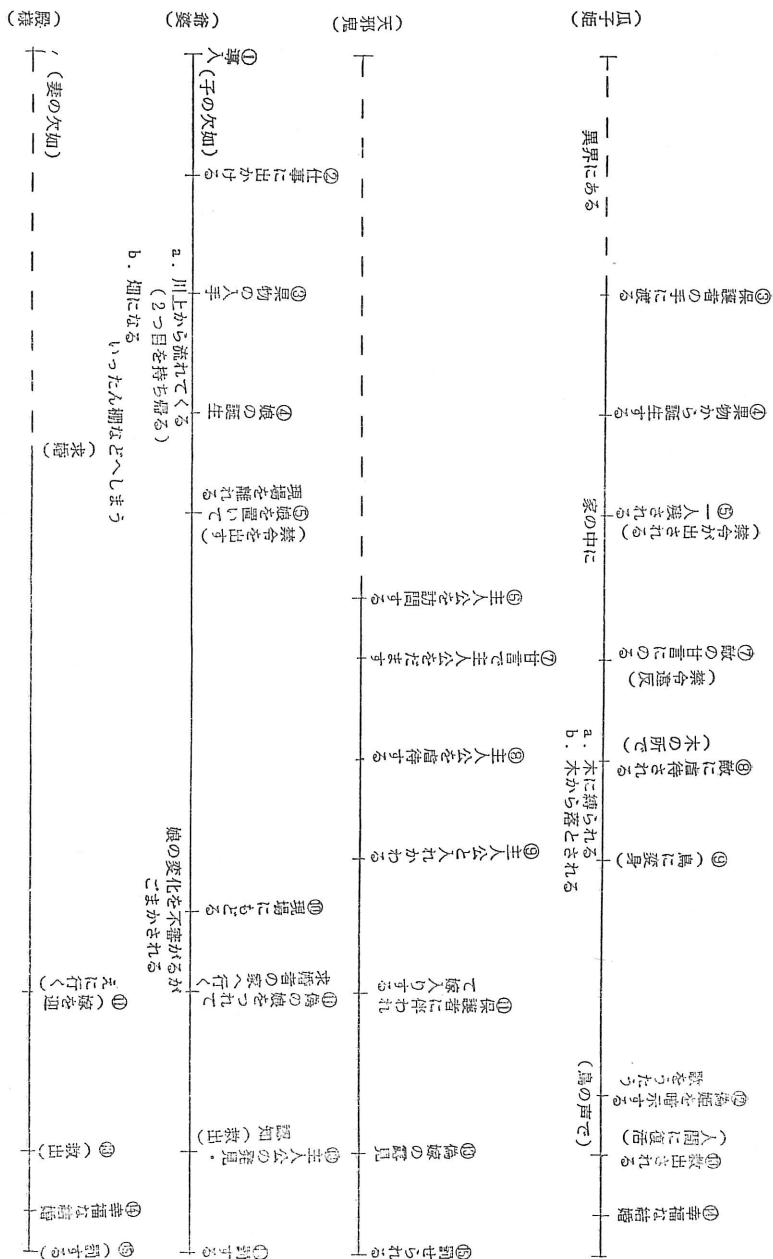
「瓜子姫」とA.T.四〇八「三つのオレンジ」との関連については、すでに関敬吾氏や池田弘子氏によって指摘されているが、異論もあるようである。たしかにこの二つの話は一見かなり違つた印象を受ける。それにもかかわらず私はここで、西南地方に多い、幸福な結婚にいたる「瓜子姫」と「三つのオレンジ」が構造的に一致することを対照図によつて示し、両者の違いとみられる点についてはその違いの意味を明らかにしたいと思う。

「三つのオレンジ」はイタリア起源といわれ、イタリアを中心とくに南欧に濃く分布し、世界的なひろがりももつ話型である。最古の文献はバジーレの『ロ・クント・デ・リ・クンティ』つまり『ペントメローネ』の最終話「三つのシトロン」である。ヨーロッパの多くの口承話がこの『ペントメローネ』の影響を受けているこ

「三つのオレンジ」「瓜子姫」対照図



「瓜子姐」



とは知られている。そのイタリアの複数の話を中心にヨーロッパの他の話も参考にして対照図を構成した。因みに、主人公の母胎である果物はオレンジ、レモン、シトロンなど甘橘類が主流ではあるが、ざくろ、りんごなどもしばしばあり、ときには果物でないこともある。また果物は一般に三つであるが一つのこともある。したがつて果物の種類と数の違いは両話の決定的な違いを示すものではない。

対照図は重要な人物の機能つまり行為をそれぞれの線上に示してある。上の三本が「三つのオレンジ」の登場人物の線であり、下の四本が「瓜子姫」の登場人物の線である。それぞれの機能には番号がふってあり、対応する機能は同じ番号になつてある。「三つのオレンジ」の筋を追いながら説明する。一番上の王子の線から話がはじまる。

①導入として妻の欠如がある。動機はaとbが主なものである。
②出立、未来の妻を求めて探索の旅に出る。旅の途中で援助者の助言があり、③果物の入手となる。果物は贈られることもあれば奪うこともある。奪った場合はそこから呪的逃走となる。逃走に成功して帰国する途中、果物をつぎつぎに割つて三つめに成功し、④オレンジ姫が誕生する。⑤王子は姫を樹上などに残し、待つように言い置いて現場を離れる。
ここで、その下の醜い娘とオレンジ姫の二本の線に移る。同じく⑤で残された姫のところに、⑥醜い娘が来て姫を発見する。そして、⑦醜い娘は姫を甘言でだまし、姫は甘言にのる。⑧姫は頭にピンをつきさされるなどの虐待をうけ、⑨鳥に変身する。同時に醜い娘が姫にとってかわり、王子を待つ。

ここに王子がふたたび加わる。⑩王子が現場に戻つてきて不審に思うが、⑪そのまま偽姫を嫁として國に伴う。⑫本物の姫が鳥の姿で来て偽嫁を暗に暴露する歌をうたう。⑬主人公が救出され、発見され、認知され、偽嫁が露見し、⑭王子と姫が幸福な結婚をし、⑮偽嫁が処罰される。

「瓜子姫」の筋は例話①の島根県の話を参考にして図を見ていた
だきたい。ただし、対照図は他の話も参考にして作成してある。
王子の役は爺と婆にとってかわられている部分が多いが、「三つのオレンジ」と対応する機能はほぼ揃っている。①妻の欠如はかく
れているが、子の欠如はあらわれている。②仕事に出た保護者によ
る③果物の入手、④果物からの誕生。⑤一人残され、⑥敵が来ると、
⑦甘言にのつて、⑧木の所で虐待される。ところで、⑨の鳥への変
身と、⑩の人間への復活は「三つのオレンジ」では重要な要素であ
るが、これが「瓜子姫」にはないとみえるかも知れない。しかし、
それがじつはあつたのだと解釈できる話もかなりみられるのである。
例話①もその一つである。まず、木の上から声をかける姫の言葉の
あとに「ピーピヨロ」と鳥の鳴き声がつくり、これは、一度は鳥
に変身したことの名残りともとれる。また「そのうち嫁にもらわれ
ることになつて」とか「嫁入りの日が來て」など姫の受難と発見の
間に時間の経過が感じられる語りには、その間に何かあったのでは
ないかと想像する余地がある。さらに話によつては「鳥の鳴き声が
するので上を見たら姫がいた」と語る話もあり、やはり一時鳥に変
身していくことをうかがわせる。
このような語りにはもちろん他の解釈も成り立つだろう。しかし、

鳥への変身と人間への復活をそこに想像することも許されるのではないだろうか。

⑨で天邪鬼がとつて代わり、⑩爺婆が現場に戻り不審に思うが、⑪そのまま偽姫を嫁入りさせる。⑫本物の姫が鳥の声と暴露の歌をうたい、⑬主人公の救出、発見と認知、偽姫の露見、⑭幸福な結婚、⑮偽姫の処罰と「三つのオレンジ」と同じ経過を辿つて終る。

では違うの方はどうであるうか。

この二つの話の違いは主人公の問題と保護者の問題に絞ることができるだろう。つまり「瓜子姫」の主人公は姫一人であるのにたいして「三つのオレンジ」では主人公は王子と姫の二人であること、そして「瓜子姫」で重要な役割を担つている爺と婆つまり保護者が「三つのオレンジ」には登場せず、王子がその役割りを兼ねていることである。

2 「瓜子姫」と「三つのオレンジ」の違いのもつ意味
昔話は語り伝えられるうちにさまざまに変化する。変化の原因や種類はいろいろであるが、その一つに語り手の視点の移動によるものが考えられる。そして私は「三つのオレンジ」と「瓜子姫」の違いも、視点の移動による変化としてとらえられる違いであると考える。

まず主人公の問題について考えてみよう。「三つのオレンジ」は王子の嫁探しにはじまり、その探索の旅と呪的の逃走が延々と語られる話が多い。ここでは明らかに主人公は王子である。ところがオレンジ姫が置き去りにされるところから、語り手の視点はオレンジ姫」とグリムの「いばら姫」には一見同じ話とは思えないほどの隔

の方に移動する。ここから主人公は姫になるといえるだろう。元来、結ばれることになる現実の男女二人はどちらも同じように主人公であるはずである。それが「話」という枠の中では、語り手の視点の置き方によって、どちらかに片寄るということが生じるのである。「三つのオレンジ」の場合は、語り手によつて多少の差はあるにしても、だいたいにおいて視点は一人に同じくらいの比率で置かれているといえる。

ところがグリムの「いばら姫」のように、ほとんど「姫」の方に視点が置かれた話もある。このグリムの「いばら姫」は構造的には「瓜子姫」と似たところがある。つまり、子のない夫婦が神に願つて一人娘を得、その娘が敵対者の悪意によつて両親の留守に痛められ、のちに王子と結ばれるという構造においてである。この「いばら姫」でも「瓜子姫」同様王子はほんの少しあか顔を出しておらず主人公とはいがたい。

これにたいして、イタリアのトスカーナ地方には、王が狩りにて雷雨に遭い避難した館で眠つてゐる姫をみつけるところからはじまる「ねむり姫」の話がある。ここでは王は主人公として登場し、途中でかけが薄くなることはあつても最後まで主人公としての役を降りることはない、「三つのオレンジ」の王子の役に近いといえるだろう。一方姫の方は主人公には違ひないが、グリムの「いばら姫」ほど独占的ではない。姫の生まれや両親については語られず、眠りに入った場面の描写もない。目が覚めた時、傭まれて魔法をかけられていたと王に話すだけである。このトスカーナの「ねむり姫」とグリムの「いばら姫」には一見同じ話とは思えないほどの隔

たりがある。ところがこの二つの話の間にペローの「眠れる森の美女」が置かれると、これが同じ話であることがわかるのである。

つまり、王と姫の間に子どもが生まれ、その子どもが王の母に食われそうになるというエピソードがペローの話とトスカーナの話に共通してついているからである。そしてこのペローの話とトスカーナの話の間にもその距離を少しづつ埋め、主人公一人の比率を少しづつ変化させていたる話がイタリアにはいくつかみられる。『ベンタメローネ』の中の「太陽と月とタリーア」もその一つである。

このような変化は語り手の視点の移動によって生じたのだと見えることができるだろう。そしてこのことは「三つのオレンジ」も視点の移動によって「瓜子姫」に変化しうるということを示している。

つぎに、保護者の問題について考えてみよう。

語り手の視点が移動し王子より姫の方がクローズアップされてくると、それにつれて三次的な影響があらわれてくる。つまり「三つのオレンジ」には登場しなかつた保護者が「瓜子姫」には顔を出し、しかも「三つのオレンジ」では王子のものであつた役割を果していることである。これも「ねむり姫」を例にして考えてみよう。

トスカーナの「ねむり姫」は「三つのオレンジ」のようくに探索者である王から話がはじまり姫の保護者は顔を出さない。ところがいくつかのイタリアの話をみると、語り手の視点が姫の方に移るにつれ保護者である両親が顔を出すようになり、その役割は次第に大きくなり、ついにはグリムの「いばら姫」のように王子のかげが薄くなつて両親がクローズアップされ、姫の誕生と呪いの場面にふくら

みが出てくるようになるのである。

このようにみると、「三つのオレンジ」から似たような変化を経て「瓜子姫」にいたり、その結果、姫のかげが薄くなり、保護者としての爺と婆の役割が大きくなつて、姫の誕生モチーフにふくらみが生じ、それにつれて王子の役割までも保護者がしょいこむことになつたのだという見方も十分許されるであろう。

ここで、日本の「瓜子姫」の話型群の中にも、もつと「三つのオレンジ」に近い話、つまり婿殿の役割のもつと大きい話があつてもいいのではないかという疑問が生じてくる。じつさい求婚者としての役割の強調されている話がないではないが「三つのオレンジ」の王子の比ではない。しかしこれは日本の特徴的な現象といえるのではないだろうか。他の話を見渡しても、日本には若い男、とくにヨーロッパの王子にあたるような高い身分の男の嫁探しの旅が語られることはあまりないようである。婿殿の役割を爺と婆がとつてかわることになる一因はここにも求められるだろう。

以上、「瓜子姫」と「三つのオレンジ」とは話の主要部分の構造が同じであること、そしてその違いは語り手の視点の移動によって生じうる範囲内にあることをみてきた。とはいへ「三つのオレンジ」が日本に伝播したと断定するつもりはない。話の後半が「三つのオレンジ」と一致する「鬼葬入り」の存在は伝播の可能性を感じさせはするが、なお残された課題である。しかし、この二つの話が別の場所で同じように発生しうるような普遍的な構造をもつた話型であるということとはいえるかも知れない。

やわりに——「瓜子姫」の分類にふれて——

「瓜子姫」という大きな話型群の中では、今見てきたような主として二人の主人公の間の視点の移動ではなく、また別の形の視点の移動をみることができよう。瓜子姫一人の生涯のどこに視点が置かれているかということである。いくつかのモチーフの欠落はそのために生じたともいえるだらう。はじめに触れたように『日本昔話通観』ではそのうち誕生モチーフの欠落のみを重視して別話型としている。

柳田国男氏以来「瓜子姫」を異常誕生譚としてとらえ、そのため誕生モチーフをもつとも重視するところとなのであらうか。それならば異常誕生譚にとってやはり重要な異常な事業としての機織りや、異常な成功としての結婚のモチーフの欠落が多いにもかかわらず、それについては無視されているのは何故だらうか。「瓜子姫」はもはや異常誕生譚としてのみとふえることはできなくなっているといつてもいいだらう。誕生モチーフの欠落も他のモチーフの欠落同様、視点の移動として、昔話の変化という問題の中で考えなければならぬことのように思われる。視点の移動とは語り手の意識、興味の変動でもある。視点の移動は昔話の変化のもつ最大の要因の一つであらう。

また『日本昔話通観』ではサブタイプ分類の根拠の一「ヒュンヒュン話型」という観点から未梢的と思われる天邪鬼の罰せられ方を重視している。この問題も含めて「瓜子姫」の『日本昔話通観』における

分類には多くの再考すべき問題をかかえているよう思つ。この小論が今後の分類見直しに少しでも資するといふのがあれば幸いである。

注

- (1) 全三十二巻のうち資料篇は一巻(アイヌ)、九巻(茨城、埼玉、千葉、東京、神奈川)及び補遺二巻が未刊であるが、他資料から判断して大勢に影響はないと思われる。
- (2) 三赤井書店刊『蒜山盆地の昔話』昭43。有精堂刊『講座日本民俗』9、口承文書。
- (3) 小学館刊『日本古典文学全集、御伽草子集』昭49。弘文堂刊『日本昔話事典』昭52。
- (4) 五來重著『鬼むかし』角川書店、「天邪鬼と瓜子姫」。
- (5) 同朋舎刊『日本昔話通観』⑭京都篇解説。
- (6) 「昔話伝説研究」10、白岩博明「瓜子織姫」と「継子と鳥」。
- (7) 「現代のエスプリ」臨時増刊号、昭53、猪野史子、「瓜子姫」の民話と焼畑農耕文化」
- (8) 同朋舎刊『閑散吾著作集』4、日本昔話の比較研究』三一ロッパ昔話の受容。
- (9) FF Communications Vol. LXXXI No. 209, «A type and motif index of Japanese folk-literature» Hiroko Ikeda.
- (10)『Fidate italiane』Italo Calvino 著。
- (11)『Novellaja fiorentina』Vittorio Imbriani 18 「Il re che andava a caccia」

(けんめい・ひらい)／昔話研究士曜会)